

それでも家へは一時過に歸つたらう。

三時頃に目が覺めた。

僕は直ぐに自轉車に乗つて家を飛び出した。

新年だ、『オンアボギヤ』と言つても誰も起きてゐない。

ハンドルを宙に三尺も持ち上げ、曲乗上手のやうに尻を浮かせて、大聲で吼え讀けた。

町全體をめぐつて、感情が高まつてくると共に、意味のない獣音を打つ突けるやうにうそぶく。

軒燈の光り丈だ。

所が急に僕は、出石寺へ之から行かうと言ふ氣を起した。

町外れの酒屋の表戸を叩いて、提灯を貸してくれと言つても、恐がつて戸をあけないので、仕

方なく僕はまつくらがりの名坂を、自轉車を引き摺り上げて、下り坂になると自轉車を飛ばした。

雑木が風にざはめく音丈だ。

二尺位先が薄白く見えるばかり、第七官で空氣の密度と溫度とを計算しながら走つてる様なものだ。

のだ。便る可きは狂信だ。